

『魔法少女りりカルなのは』
は』 作者：『転生者』

am24

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——『魔法少女リリカルなのは』——これは、とあるブログで掲載されたネット小説である。高町なのははある日、その小説を目にした。自分と同じ名前、境遇の主人公に興味を抱いたのは自然な流れであった。しかし、それが自身の運命をも左右する物語であったなどとは、当時のなのはには知る由もなかった。

目次

| | | |
|----|-----------------|----|
| | プロローグ | 1 |
| | 1話 『原作改変』 | 12 |
| 26 | 2話 『とらいあんぐるハート』 | |
| | 3話 『夜の一族』 | 40 |
| | 4話 『久遠』 | 49 |
| | 5話 『レイジングハート』 | 62 |

プロローグ

私立聖翔大付属小学校1年の高町なのはは目の前で繰り広げられているイジメを止めようと行動を開始した。

被害者の子は彼女のクラスメート月村すすかである。紫色の長い髪をした大人しそうな子で、よく1人で読書をしているのを目にするが、彼女とは挨拶程度は交わした事があるが、話をした事は無い。

加害者の子もまた彼女のクラスメートアリサ・バニングスである。金色の髪が印象的な子で、周囲を馬鹿にした態度で、どこか近寄り難い雰囲気醸し出していた為、彼女とも話をした事が無い。

その2人は対称的な子であったが、共通した事柄がある。それは、クラス内で孤立していたと言う点である。

なのははそんな2人とお話をしてみたいと、普段から気に掛けていた。1人で居る事はとてもとても寂しい事だから――。

事の発端はアリサの手にした白いカチューシャであると、簡単に推測できた。それは、さすが普段から身に着けていた記憶がある。イジメを止めようと思いついたものの、

なのははどうすれば良いのか分からなかった。結果、思いだけが先走り2人の前に飛び出した。そしてアリサが睨み付けて来るのも構わず、思いつき彼女の頬を叩いた。

「痛い？ でも大事なものを取られちゃった人の心はもっともっと痛いんだよ」

なのはは思いの丈をぶつけたが、ふと、既視感に見舞われた。この状況、どこかで――

しかし、考える間は彼女には与えられなかった。アリサが彼女に掴みかかって来た為、目の前の事を何とかしようとして行動した。

あわや、殴り合いの喧嘩が勃発するかと言う時、思い掛けない場所から声が掛かった。
「やめてええええ！」

それは被害者の子すずかであった。普段の雰囲気からは想像も付かない見幕で叫ぶ彼女になのもアリサも呆気に取られたのであった。

頭が冷えたのか、アリサはばつの悪そうな表情で手にしたカチューシャをすずかに返したのである。

「……その……ごめん、なさい」

アリサは微かに聞こえる声で謝罪を言い、走り去って行った。しかし、残された2人が最後に見たアリサの目元には涙が浮かんでいた。

それを見た2人はお互いに頷き合い、アリサを追いかけたのだった。

アリサは思いの外速く、なのはは彼女に追い着きそうになかった。しかし、同時に走り出したはずのすずかはアリサ以上に速く、徐々に距離を詰めるのであった。

「なんで、追いかけて、来るのよ！」

アリサも2人が追いかけて来るのに気づき、さらに速度を上げた。すずかはそれでも追従する事が出来たが、なのはは限界であった。

すずかがアリサに手が届く距離までに追いつがった刹那、ドサツと後方から大きな音がした。すずかとアリサは振り返り確認すると、そこには倒れているのが居るのだった。

逸早くなのはの元へと駆け付けたのは意外にもアリサであった。

「あんた、大丈夫？」

アリサはなのはを助け起こそうと手を差し出した。

「にやはは、捕まえたの」

アリサの手を取って立ち上がったなのははその手を離さず、笑い掛けたのである。

「あんたねえ——」

「あんたじゃないよ。なのはだよ。私の名前は高町なのは」

「あんた——」

「なのは」

なのはの勢いに氣勢を殺がれ、アリサは沈黙する。普段の勝気な雰囲気は微塵も無く、迷子の小動物のような戸惑った雰囲気を出していた。どうしていいのか分からず、アリサは後ろに居るすずかの方へと顔を向けた。

すずかはにつこりとアリサに笑い掛け、アリサの残った手を取って言うのである。

「わ、私は……すずか、月村すずか、です」

すずかにはにかみながらも名前を告げるのであった。

「あ、あんた達ねえ——」

「なのは」

「……すずか」

先程から変わらないなのは。か細い声でそれに便乗するすずか。そんな2人に呆れたアリサは意地を張っていた自分が馬鹿らしくなってきた。

「なのは、すずか、……これで良い？」

嬉しそうなすずかとは対称的に、なのははまだ不満顔であった。アリサはなのはが何を言いたいのかすぐに気が付いた。

「……私はアリサ、アリサ・バニングスよ」

「うん！ アリサちゃん」

アリサの返答に満足がいったのか、なのはは満面の笑みで頷いた。

「……で、いつまで手を握っているわけ？」

先程のやり取りもそうだが、アリサは両手を2人に塞がれた現状について悪態を吐いた。

「アリサちゃんが逃げなくなるまでだよ」

なのは強い眼差しでアリサを見詰めるのであった。後ろのすずかはすでに現状を楽しんで居り、振り返ったアリサに対して笑みを浮かべるのみであった。

「もう逃げないわよ。それよりあん——なのは、盛大に転んだけど大丈夫なわけ？」

あんたと言いついそうになるとなのはが睨んできた為、慌てて訂正をした。

「にやはは、なのはは転ぶのには慣れているのです」

「でもなのはちゃん、お膝から血が出てるよ？」

なのはは茶目つ気を出して笑うのだが、先程まで静観していたすずかがなのはの心配をした。

「え？ ……だ、大丈夫だよ」

言われて気付いたのか、なのはは自身の怪我を初めて認識した。すると途端に痛みが襲ってきたが、気丈に返事を返した。

「どう見ても大丈夫な顔じゃないわよ。保健室に行くわよ。……す、すずかも良い？」

「うん！」

アリサの手を握っていたすずかは今度はなのはの手を取り、アリサもまたなのはの手を握り返す事により、なのはは先程のアリサとは逆の立場へとなってしまった。

「むー、なのはは逃げないのですよー」

不満の声を返すが、なのはの表情には笑みが浮かんでいるのであった。

なのはは保健室で怪我の治療を受け、現在は膝に大きな絆創膏を貼った状態である。

「きよ、今日は家の車で送ってあげるわ」

「!? うん！ よろしくお願いします」

放課後になってアリサがなのはにそう提案してきた。なのはは赤面しながらも自分を氣遣ってくれるアリサにとっても嬉しくなった。

「べ、別になのはの為じゃないんだからね。こ、これは……そう、これは私の所為で怪我をしたなのはを一人で返すわけにはいかないからで——」

「うん！ うん！」

必死に言い訳をするアリサが可愛く、なのはは満面の笑みで返事を返すのだった。すずかもまた、そんな2人のやり取りを微笑ましく見守っていたのだったが、

「——すずか！ あんたも序でに送って行ってあげるわ」

これ以上の発言は泥沼であると気付いたアリサは話の矛先をすずかへと変えたの

だった。

「え？　でも……」

しかし当のすずかは困惑をってしまった。

「嫌なら別に構わないわ……」

アリサは自分ですずかに嫌われる事をしてしまったのだと改めて実感し、声のトーンが落ちて行つたが――、

「い、嫌じゃないよ。ただ……」

嫌われていないと分かりアリサは安堵したが、すずかのしどろもどろな態度に苛立ちを覚えてきた。

「折角だからすずかちゃんも一緒に帰ろ？」

なのはのその一言によつてアリサはすずかに苛立ちをぶつけずに済んだのである。

「私なんか一緒に迷惑じゃないかな？」

「私はすずかちゃんと一緒に嬉しいよ。ね？　アリサちゃん」

はつきりと自分の意思を言う事の出来ないすずかは2人に遠慮してしまつたが、間髪入れずになのはがすずかを受け入れたのである。そして、すずかはなのはと共にこの場でまだ発言をしていない人物へと視線を向け――、

「わ、私から誘つたんだから、迷惑なわけではないでしょ」

そうして、アリサ、なのは、すずかの3人はアリサの家の車で帰宅する事になったのだった。

次の日の朝、学校に登校したなのはは教室にすでに来ていたアリサとすずかを目にして満面の笑みで2人に近づいた。幸いにも2人の席は近かったのである。

「おはよう。アリサちゃん、すずかちゃん」

「おはよう、なのはちゃん」

「……おはよう」

なのはの挨拶にすずかは小さい声ながらもきちんと返事を返したが、アリサはどこか怪訝な様子で返した。

「昨日の今日であんたは——」

「なのは」

「……なのははどういう神経をしているわけ？」

昨日は確かに2人を送ったが、元を正せばなのは達とは喧嘩をした仲なのである。アリサの怪訝はそんな自分にどうして平気で挨拶が出来るのかであったが——、

「どうって、お友達と挨拶するのは当然だよ？」

「……………おは。」

アリサにとって昨日の行いは単なる社交辞令に近いものであって、お友達だからと言うわけでは決していない。そのため、どうしてなのはそのことによって自分がお友達になつていのか、が理解出来なかつた。

「な、なのはちゃん。私もお友達で良いのかな？」

アリサが問い質そうとする前に、さすがなのはに質問をした。

「うん！」

なのはとすずかの間にはほんわかとした空気が流れる。

「あんた達——なのはとすずかはそうかもしれないけど、私は……」

「勿論ありさちゃんもお友達だよ」

「だから何で——、いつの間にそうなつたのよ！」

「だって——」

アリサの見幕をどこ吹く風よと受け流し、なのはは微笑みながら言うのである。

「——私達はもう、名前呼び合つてるから」

アリサは自分は今この目の前で無邪気に微笑む子から逃げられないんだなあと感じたが、それは決して嫌な感情ではなかつた。しかし、素直になれないアリサはなののはの言に反論しようとしたが、

「じゃあ、私とアリサちゃんも……お友達だね」

まさかのすずかからのお友達発現である。

「すずかはそれで良いの？　だって私はすずかに——」

「うん！　だって、アリサちゃんは優しい人だって分かったから。転んだのはちゃんを真つ先に助けたのはアリサちゃんだよ？」

「そ、それは——」

「それに、私も誘ってくれたから」

「でも私は！　私はすずかに酷い事を！」

「でも、ごめんなさいってちゃんと返してくれたよね？」

「え？　聞こえ、て……」

アリサはあの時の謝罪がすずかにきちんと聞こえていた事を知り、一気に赤面するのだった。

「私も悪かったから」

「どうしてすずかが悪いのよ？」

「だって、私もあの時、返してって言えなかったから……」

「……言われたからってきつと返さなかったわ」

「それでも！　それでも言葉にしないと伝わらないから。なのはちゃんみたいに」
「ふえ？」

突然振られたセリフになのはは唾然としてしまった。と、ここに来てチャイムの音が耳に入り、なのはは慌てて席へと向かった。しかし、そんななのはにアリサは後ろから声を掛けるのだった。

「なのは！ 今日のお昼は一緒に屋上に行きわよ！ す、すずかもね」

なのはは了承の意を伝えて急いで着席した。しかしすずかは――、

「え？ 私も良いの？」

「良いに決まってるじゃない。だって私達は……と、とと、友達、でしょ？」

こうして、なのは、アリサ、すずかの3人は友達になったのだった。否、3人はあの時――3人で手を握り合った時から友達になっていたのであった。

1話 『原作改変』

なのは達が友達になって数か月が経過した。そうして、3人はすでに親友と言つて良
い程の仲となつた。そうになると、お互いの家に遊びに行く事もしばしばあつた。

なのはは初めてアリサ、すずかの家に行つた時に言いようの無い既視感に見舞われた
のであつた。

アリサの家では大勢の犬を見た時にそれを感じ、すずかの家で猫達に囲まれた時、そ
れ以上に強く感じたのである。初めてなのにもまるで自分は2人の家の事を知つていた
と――。

2人の家に行く前に、事前に家の事を聞いていた為、アリサの家で感じたそれは勘違
いであつたのであろうと思ひ込んだが、すずかの家でのそれは、勘違いでは済まされな
い何かを感じたのであつた。

しかしその既視感は、知つてるのに知らないという矛盾に満ちた感覚であつた為、な
のははその正体になかなか気付く事が出来ず、悶々とした日々を過ごすのだった。

そうして、とある日でのいつもの家族の団欒中の出来事である。それはなのはの父土

郎のとある発現から始まる。

「みんな、注目！ 今から重大発表をしまーす」

「きゃー、待ってましたー」

拍手をして父を煽るのは母桃子である。ありがとうと言い、土郎は桃子といちやいちやラヴラヴを始める。彼女達は今でも新婚のように仲が良く、こういつた行動を取るのには日常茶飯事である為、こういう場合はスルーするのが高町家3兄妹にとっては暗黙の了解となっていた。

「で？ 重大発表って何だ？」

いい加減じれなくなったのか、兄恭也が先を促した。

「じゃーんー！」

そう言つて土郎が取り出したのは緑色の淵をしたシンプルなデザインの白い服であった。デザイン各種は緑色で統一されており、胸元には『MIDORIYA』というロゴが描かれており、と肩、から袖元までに二重のラインが走っている。

「それってもしかして家の新しい制服とか？」

桃子の嬌声はスルーし、姉美由希が質問する。

「ちつちつち、残念ながら違います」

「え？ でも『MIDORIYA』って書いてるよ？」

なのはもまた疑問を口にした。

「実はなんと士郎さんは——」

「サッカーチームのオーナーになりました！」

「「な、なんだって——」」

3 兄妹は桃子の掲示したスケッチブックを棒読みに唱和した。そして、桃子がどこからともなく取り出した紙吹雪がリビングに舞う。

「むー、紙が目には——」

「大丈夫かなのは？」

「もう、母さん！ 何散らかしてるのよ！」

「掃除をするのは母さんと士郎さんだから良いもん「ねえ」」

桃子と士郎が頷き合う。この演出を含めた発表はどうやら2人に予め仕込まれていたものであったと3兄妹は知るのだった。しかし、ここまで演出に手を掛けられたものの、3人の反応はいまいちであった。

「ん？ 父さん、サッカーチームのオーナーになったって言ったか？」

「ああ」

「翠屋の店主に専念するってこの前言ってなかったか？」

恭也が話を元に戻して士郎に問い質した。

「サツカーチームって言っても町内会での催しみたいなものだ。海鳴商店街近辺の子を集めた『翠屋JFC』と桜台近郊の住宅街の子を集めた『桜台JFC』が新しく出来た。」

「——『翠屋JFC』……」

「なのは？ どうしたんだ？」

「!? にやはは、何でもないの」

「ん？ そうか、翠屋の店主は——」

士郎が話を続けるが、なのははそれをうわの空で聞いていた。『翠屋JFC』その単語を耳にした瞬間、なのはは今まで感じていた既視感の正体に気付いたからである。それはある物語で『高町なのは』がとある決意をする出来事に関連した単語であったのである。

士郎の話が終わってすぐに、なのはは自身の部屋へと駆け付けた。そしてパソコンの電源を入れる。

何故彼女の部屋にパソコンが設置されているかという答えは単純である。高町家の住人は彼女以外ともにパソコンを扱えないからである。

ではそんな高町家にそもそも何故パソコンが存在するのかというのも至極簡単な理由である。警備員の仕事中大怪我をして入院した士郎が、退院と同時に警備員を引退し、翠屋の店主に専念すると宣言したのである。その店主業の一環として、翠屋のホー

ムページを開設する事にした為である。

そうしてパソコンを購入し、ネット回線を繋げたものの、士郎はホームページの開設を挫折した。見かねたなのはが説明書を読み耽り、代わりにホームページを作り上げたのである。そのホームページの管理もまたなのはが行う事となり、結果、なのはの部屋へとパソコンが設置される事となったのである。

パソコンが立ち上がると、なのははネットへと繋いだ。そして記憶の中にある検索ワードを打ち込んでいく。

——『魔法少女リリカルなのは』

関連記事が表示されるが、どれも掲示板関係で目的のサイトは見つからなかった。なのははさらに検索ワードを打ち込んで記事を絞り込もうと試みた。

——『翠屋JFC』

今度は表示記事件数が3桁となった。そして、今まで既視感を感じた単語を片っ端から打ち込んでいくと、とある記事に目が留まった。それはなのはが過去に発見したブログそのものであったのだ。

——『原作改変』

それがこのブログのタイトルである。一風変わったタイトルであり、何を改変するか、このブログを発見した当時のなのはには分からなかった。何故なら、このブログに

は冗談のような管理人『転生者』のプロフィールと、『転生者』が書いた小説が数点掲載されているのみだからである。

その小説に関しても、現代を背景にファンタジー要素を取り入れたどこにでもありそうな物語であり、紆余曲折あるものの、何れもハッピーエンドに終わる物語であった。そして何れの物語にも同じ文言の後書きで締めくくられている。

——『この小説をネット上に掲載する事こそ僕の原作介入だ』

しかし、今なら分かる気がする。

『転生者』が何を改変したかったのか——。原作とは何だったのか——。そして、何故小説の掲載が介入に繋がるのか——。

いくつもの疑問のピースが1つに繋がった瞬間、なのはは戦慄した。そして、この瞬間からこのブログはなのはにとって、とても大きな意味を持つものへと変わったのである。

なのはは今すぐに家族に伝えようと立ち上がったが、寸での所で思い留まった。

それはなのは自身の発言である。

「ネットの情報は鵜呑みにしてはいけません」

なのははそう家族に対して得意げに語ったのである。それに、こんな突拍子もない事を聞かせても家族を心配させるだけである。彼女の脳裏には今日の楽しいな家族の団

變風景が思い起こされるのだった。

やっぱり家族には言えない。なのははそう決意するのであった。

原作とは、このブログに掲載されている小説そのものである。

そして、この小説は主人公の『高町なのは』つまり、なのはの未来の出来事を綴っている。それを知ってしまったなのははもう、この小説の内容——原作——を無視する事が出来ない。仮に忘れようとしても、心のどこかに原作の存在が見え隠れするだろう。

つまり、原作改変とは——、

——なのは自身がこれから行うのである。

『転生者』は後書きで読者であるなのはにそう語りかける事によって原作介入を果たしたのである。この小説の最終掲載日は10年以上も前である。見ず知らない者、しかもまだ生まれてすらいない者へと向けたメッセージであるという突拍子もない仮説をなのははすんなりと信じる事が出来た。

そもそも、『転生者』の語る原作が真実であるなら、『転生者』はなのはの性格、行動パターンを熟知しているはずである。そうすると、今のなのはがネットでそれを目撃する可能性は高いと推測出来るはずだからである。ましてや、魔法である。魔法という

ファンタジーが実在するのなら、未来予知染みたこの原作も現実にあり得るかもしれない。

事実なのはこの小説を目にした。『転生者』の思惑通りに――。

この事実を前にしても、なのはには悲観した気持ちは一切表れなかつた。そもそもこの物語は過程は兎も角、ハッピーエンドで終わるのである。多少未来の事が分かつたところで、悲観する要素にはなり得ない。むしろ、この情報を元に、もつと上手く行動できるとは思ふのである。

そして最も特筆すべき点は、なんとと言っても魔法である。

なのは自身、自分には何も取り柄が無いと思ひ込んでいる節がある。勉強はアリサには及ばず、頭の回転もすずか程良くない。運動も兄や姉のように出来ないし、料理だつて母には到底及ばない。

そんな自分も物語の主人公のように華々しく活躍できるのだと思うと、胸の高まりを抑える事が出来ない。

そしてなのはは改めて『魔法少女リリカルなのは』に目を通すのだった。

休日のある日、なのははお弁当を持って一人で海鳴臨界公園へと向かつた。そこは原作における様々な出会いと別れの舞台となる場所である。

なのは自身、今よりまだ小さかった頃、とある出会いを経験した思い出の場所である。最近では友達と過ごす頻度が増した為、あまり訪れていなかったが、あの日から何度か足を運ぶようになった場所である。そうすればいつかあの人にまた会えるような気がして――。

ここ海鳴臨界公園はその名の通り、海に面した場所にある公園である。海鳴大学病院のすぐ隣に位置し、療養地としても広く愛されている。休日ともなると、恋人達が過ごす名所ともなっている。そのため、多くの人が訪れる事もあって、様々な出店も展開されている。

何度がここに訪れているのはも出店の主人とは顔なじみとなっているが、どうやら今日はお休みのようだ。それどころか、今日は公園に入ってからまだ誰ともすれ違っていない。

訝しんだのはだが、ふと思いついた。今日は商店街で催しものがあったという事を。

本来はお店のお手伝いをしたかったが、今日はいつもより忙しくなるからという理由で、まだ小さい人には厳しいだろうとお手伝いをさせてもらえなかった。

さらに友達のアリサとすずかは今日はお稽古があるらしく、珍しく1人で過ごすはめとなったのは例の原作を再び読んだ事も相まって、ここに訪れたのである。

そして今は都合よく誰も居ない。そんな誰も居ない解放感からなのは『高町なのは』のように両手前に出してとある一節を口ずさむ。

「——リリカル・マジカル……………」

当然何も起こる事はない。それでもなのはは楽しくて何度も口ずさむのである。

しかしそこで後ろから人が近づくと気が配がした。振り返るとそこには大学生くらいだろうか、ポロシャツにジーパンの少し小太りな青年が居た。彼の瞳は確実になのはを捕え、徐々に近づいてくる。

人がいた事になのはは恥ずかしくなったが、自身に近づいてくる青年の瞳には鬼気迫るものを感じられ、若干後ずさる。しかし、もしかしたらこの青年は自分に用があるだけではないかと、何とかその場に留まる事が出来た。

「あの……………なのはに何が御用ですか？」

気丈にもなのはは青年へと声を掛けた。すると青年はなのはの質問に暫く返事をする事なく、喜色の表情を浮かべるのだった。

「やっぱり、本物の『なのは』ちゃん、だ……………僕の、仮説は、正しかったんだ……………」

青年は誰に語るでもなく、ぶつぶつと独り言を呟く。ここにきてなのはは目の前の青年がまともな存在でないと思悟る。急いでここから離れようと思ったが、突然青年が話しかけて来た。

「な、『なのは』ちゃんは……や、やっぱり魔法少女、なんだよね？」

青年の言う、魔法少女という単語を聞いた途端、なのはは体を硬直させた。それはつい最近となって聞き覚えのある単語であった。なんで、となのはは思ったが、青年が自分のにじり寄ってくる恐怖から上手く言葉が出ない。

「い、今はいつ頃なんだろう……何とか言つてよ。ねえ、『なのは』ちゃん！」

「ち、違います。わ、私は魔法少女なんかじゃありません」

本来は嬉しいはずの名前を呼ばれ、なのはの中には恐怖の感情が支配した。そのため、なのははこの青年とこれ以上関わりたくないと思い、必死に否定した。しかし、

「そ、そんなはずはない！ さつきだつて、呪文を唱えていたじゃないか！ そ、それに今だつて、周りに人が居ない。封時結界を使つたんだろ！ ぼ、僕は特別な存在だから結界内でも入る事が出来たんだ。き、君さえ居れば、僕も魔法が——」

もはや青年が何を言っているのか、なのはには全く理解出来なかつた。すぐさまここから離れようと駆け出したが、青年に右腕を掴まれてしまった。

「いやあああ!! 離してえええええ!!」

「ま、待て! 逃げるな!!」

必死に手を振り解こうとするが、抜け出せる気配がない。なのはは必死に助けを呼ぶのだった。

「助けてええ！ お兄ちゃん！ お姉ちゃん！」

「む、無駄だよ。今は誰も、いだだだ」

青年は突然訪れた腕の痛みからなのはを捕まえていた手を放してしまった。すると突然、体が180度回転する感覚に見舞われた。

「未成年者略取の現行犯で逮捕するよ」

そうして、青年はうつ伏せの状態で、後ろ手に手錠をはめられてしまったのだ。

突然の事態に、当事者であるなのも暫く呆然と立ち尽くしてしまった。

「ふう、間に合って良かった。ところで君、怪我は無いかい？」

青年を取り押さえた女性が話し掛けて来た事により、なののは我を取り戻した。

「え？ あ、はい。なんともありません」

「そうかい。それは何よりだ。それにしてもこの手の輩がまだ居たなんて——、油断したこちらの落ち度だ」

「え？ どういう——」

「いや、なんでもないよ」

そう言つて、女性は手を振つてなのには笑い掛ける。しかし、なのには怪訝な気持ち拭いきれないでいた。

なぜなら、なののははこの女性に見覚えがあつたからである。あの時は夕暮れ時であつ

たが、件の女性はなのとはとってとても印象的であった。夕闇の中、銀色に輝く髪をなびかせ、颯爽と現れてはなのはを助け、泣いてるなのはにニヒルな微笑みを浮かべては宥め、家まで送ってもらった記憶がある。

「そんな思いでの女性が言った言葉に引つ掛かりを感じたのである。もしかしたらこの女性も『魔法少女リリカルなのは』について知っているのではないかと——」。

なののが思考に没頭していると、突然、目の前の女性は驚愕の表情を見せた。

「まさか、その年であれを知ってるとはね」

「え？　なんで——」

女性はなののはの思考に合わせたかのように発言した。なののはは突然の事態にドキリとしてしまった。

「そうだね。まずは自己紹介からしよう。僕はリスティ・楨原。まあ、警察の関係者かな。よろしく」

なののはの疑問を置いてきぼりに、女性リスティは自己紹介を開始した。

「わ、私は高町なのは、私立聖翔大付属小学校の1年生です」

なののはも取り敢えず、自己紹介をした。

「うん。いい子だ」

そう言っつてリスティはなののはの頭を撫でてくる。怪訝な気持ちは消えないが、撫でら

れる安らかな気持ちから、先程までの恐怖が一気に噴き出してきて、涙が溢れてきた。そしてなのは優しく頭を撫でてくれるリステイに思わず泣きついた。

リステイもなのはの気持ちを察し、暫くなのはを抱きしめるのだった。

『原作改変』の引き起こす波紋はここに新たな出会いを産み落とす。この出会いが何を意味するのか、なのはは知る由もなかった。

2話 『とらいあんぐるハート』

あの後、落ち着いたなのははりステイに連れられ病院に来ている。といつても、どこかが悪いというわけでもなく、その方が都合が良いという理由で訪れたのである。

「邪魔するよ」

とある部屋の前まで来ると、りステイは徐に扉を開けて中に入った。なのはもその後が続いた。

「邪魔するなら帰って下さい」

中から声を掛けて来たのは、りステイを長髪にしたような、物腰の穏やかそうな白衣の女性だった。言ってる事は辛辣だが、その言葉に険はなく、寧ろ歓迎しているかのようになのはには聞こえた。

「そう言うなって」

「また集りに来たんでしょ」

「いや、それもあるが……」

そう言っつてりステイは後ろにいるなのはに視線を向ける。

「あら、その子は？」

「例の子だよ。……本人も知ってるみたいだから、ね」

リステイと白衣の女性は何やらアイコンタクトを交わしていたかと思うと、今度は白衣の女性がなのはの方へと近づいてきた。そしてなのはの前でしゃがみ、目線を合わせてから挨拶をしてきた。

「こんにちは。私はフィリス・矢沢。そのリステイの妹って事になるかな。よろしくね」

「あ、はい。こんにちは、高町なのはです」

そうしてなのははフィリスに促されるまま椅子に座った。

「聞きたい事があるんだろ？」

リステイが煙草を右手で弄りながらなのはに聞いてきた。

「はい。お姉さんもなのはの事を知ってるんですか？」

なのはは今一番聞きたかった事を質問してみた。

「ん。知ってるってのは語弊があるけど、答えはYesだ。後、僕の事はリステイで良い」

「あ、私もフィリスで良いわよ。……はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

奥で作業していたフィリスがなのはにマグカップを手渡してきた。湯気の中から漂

う甘いカカオの香りがなのはの鼻腔を擽った。

「僕はココアよりコーヒーが良かったな」

「ここにそんな物はありません」

「お子ちゃまめ」

リスティは悪態を吐きつつも渡されたココアを口にしました。

「なのははもちろんそうだけど、僕達も当事者だったからね」

「え？ それって……」

リスティの思いもよらぬ発言になのはは疑問符を浮かべた。

「あれ？ なのはちゃんって……」

「ああ、あつちあつちに関しては知らないようだ」

またしても2人だけで話し合うリスティとフィリスになのはは怪訝な気持ちになった。

「あのー！」

「ああ、ごめんごめん。ちゃんと話すよ」

「ごめんなさいね」

そしてリスティは語るのである。

「なのはもあのサイト『原作改変』は知ってるだろ？」

「はい」

「なのはが見たのはその中の『魔法少女リリカルなのは』シリーズだと思う」

「はい、そうです。でもその中には……」

「ああ、それには僕達は関係してないからね」

「？」

「なのはちゃん、あのサイトには『魔法少女リリカルなのは』以外にももう1つ別の作品があつたのを覚えてる？」

「!? はい！ 覚えてます。お兄ちゃんが登場してたと思いますが……恥ずかしながら途中で断念してしまったのです」

「まあ、それは仕方ないのかもね。あれはなのはちゃんにはまだ早かったかもしれないわね」

「いえ、そうでは無く……難しい漢字ばかりで読めなかつたのです……」

なのはは自分の不甲斐無さに少し落ち込んでしまった。

「確かにあつちには『魔法少女リリカルなのは』と違ってルビなんて無かつたね。それでもその年であのサイトを発見した事だけでも十分すごい事なん、だけ、ど——!? そうか、だから……」

なのはを慰める傍ら、リステイはある事に気が付いた。それは『魔法少女リリカルな

のは』のルビについてである。

『魔法少女リリカルなのは』はそのタイトルからももちろん、子供向けの話であると思われた。そのため、ルビが振られている事に不思議はないが、問題はそのルビの量にあった。

大人でも難しい漢字にはもちろん、子供でさえ簡単に読めるだろう漢字にもそれはもう、鬱陶しいまでにルビが振られていたのである。ルビが無い漢字と言ったら、人物名くらいのものであろうが、作中の登場人物の大半はカタカナ表記か、名前自体がひらがな表記である。

しかしその丁寧なルビ表示の反面、内容は当時の子供向けと言うには斬新な設定が多く盛り込まれていた。それは、『魔法少女』でありながら、戦闘を主体として物語が展開していく点である。

当時にも『魔法少女』ものというのは存在していた。それはまさしく、少女向けの話であり、夢見る女の子を描いた物語で、魔法という未知の力を用いて数々の難事件を解決、というのが主流であった。その中には荒事もあったが、魔法を使った戦闘というのは稀であった。

もちろん、魔法≠非戦闘ではなく、少年向けの話では普通に魔法を用いた戦闘も行っている。魔法を使う少女もいるが、それは『魔法少女』と言うにはどこか違和感があつ

た。そしてその人物はヒロインか脇役としての登場であり、話の主人公は大抵男なのである。

しかしそれは、読者の嗜好を反映させた結果なのであり、自然な帰結である。それを踏まえた上で『魔法少女リリカルなのは』について考えてみる。

主人公の『高町なのは』は小学3年生である。それがただの『魔法少女』であれば、それは少女向けの作品であつただろう。しかし、戦闘を主体とした作品は当時の少女には受けは悪く、少年向けの話となつてしまう。ところが、主人公が女の子という事から、少年では物語の主人公に感情移入がし難く、これもまた好まれ難い。そして一番考えて欲しい点は、そもそもこの『魔法少女リリカルなのは』がネット小説であるという点である。

インターネットをする少年、少女というのは果たしてどれほどいる事だろう。そう考えると、読者層は青年層から中年層であると想像に難くない。そうすると、このジャンルの青年向けの話という事になる。

そうすると、作者である『転生者』がそこまで考えていたかは分からないが、多くの読者にとってこのルビは不要のものであると感じる事だろう。

しかし、『転生者』の狙いが原作改変であると考えると、このルビも意味のあるものとなつてくる。無関係の不特定多数の人物より、当事者に見てもらおう方がそれは確実に行

えるだろう。

つまり、『転生者』は初めから高町なのはにこの小説を読んでもらおうと、執拗なまでにルビを振ったのではないか――。

リスティは驚愕の真実に戦慄した。『転生者』はいったいどこまで見越しているのか――。

「リスティ、何か分かったの？」

フィリスの問い掛けにリスティは思考の海から戻ってきた。

「ああ、それは後で話すよ。それより……」

なのはが不思議そうな顔でリスティを眺めているのだった。

「話を続けよう。『魔法少女リリカルなのは』以外でなのはの兄さんも登場する『とらいあんぐるハート』に僕達は登場してたのさ」

「主にリスティが、だけどね」

ここにきてやつとなのにも得心が行った。

「フィリスなんてただの戦闘員Aとしての登場だけだったしね」

「もう、それをあなたが言うの？」

「ごめんごめん」

そう和やかな会話が展開されていくが、なのはは耳を疑った。この穏やかそうな人と

戦闘員という単語がどうしても結びつかないからである。話を聞く限りではどうやら本当の事のようにあるが……。

「さつきも言った通り、僕達が当事者っていうのは何も作品に登場していたからってだけじゃないんだ。僕達が登場する『とらいあんぐるハート』の2作目は今から6年前が舞台だったんだ」

「え？」

「そう。その通り、とまではいかなかったけど、概ね小説の通りの出来事が起こったよ。僕がこの小説の事を知ったのは、殆ど終わった後だったけどね」

「だからこそ、私達はあの小説が現実の、それも未来の出来事を綴ったものだって分かったの」

「と言つても、『とらいあんぐるハート』は幾つかの分岐したシナリオが描かれてるから、完全に現実と一致するって事はあり得ないんだけどね」

そう、『とらいあんぐるハート』は各作品に決まった主人公が設定されており、その主人公と特定のヒロインとの恋愛事情が描かれた作品なのである。それは、同じ時系列の中、ヒロイン毎に物語が展開していく内容となっている。

なのはが見たと言う兄の『高町恭也』はこの1作目の『とらいあんぐるハート3』の主人公である。そしてリステイ達が登場するのは2作目の『とらいあんぐるハート2』

である。とりわけリステイはそのヒロインに抜粋されていたのである。

そう、どういうわけか、『とらいあんぐるハート』シリーズは1作目が3で、2作目が2、3作目が1と、掲載された順番と作品の番号が逆なのであった。

最初に掲載された『魔法少女リリカルなのは』シリーズのスピンオフ作品としては、その掲載順は理解できるが、3から始まっているのは謎であった。単純に、作品内での時系列順とみる事ができるが、そこから、作者である『転生者』は未来の出来事を全て分かった上でこの作品を掲載したのではないかと思えてくる。

『転生者』が最も意識しているのは『魔法少女リリカルなのは』であると推測できる。なぜなら、この作品は『とらいあんぐるハート』とは違い、1つのシナリオしか描かれていないからである。

まるで『とらいあんぐるハート』シリーズは『魔法少女リリカルなのは』シリーズに對するヒントであるかのような錯覚を覚える。

2と1は主人公の『高町なのは』が生まれる前の話で、直接的な関わりは当然持てないが、間接的に大きな関わりを持つ事になっている。

そして最も関わりのありそうな3は『高町なのは』の兄『高町恭也』が主人公である事も加え、『魔法少女リリカルなのは』の開始1年前であるという点に、勘繰りを持ってしまふは自然な流れである。

といつても、作品内での前提条件と現実では最初から幾つかの違いが生じている事から、これは真実を知った読者を迷わす罠であるという可能性も否定できない。

「来年が『とらいあんぐるハート3』で再来年がいよいよ『魔法少女リリカルなのは』ね……」

「そうだね、これからなのはには今日みたいな出来事が増えるかもしれないから1人で出歩くのは控えるように」

「はい！」

「ちよつとリスティ、今日みたいってどういう事？」

「ああ、実は——」

リスティは今日の臨界公園での出来事をフィリスに説明していく。

「そう……これはもう啓吾さんに協力してもらうしかなさそうね」

「ああ、そのつもりだ」

なにやら事が大きくなっていく様子になのはは不安になっていく。

「あ、あの！なのはもその『とらいあんぐるハート3』を読んでいた方が良いですか？

今なら少しは読めると思いますが……」

「……いや、読まなくても良いよ。それにはたいして重要な事は描かれていないしね。

それに下手にいろんな事を知っても却って混乱するだけさ。なのはは自然なままで居

てくれれば良い。フオローは僕達大人の仕事さ」

リステイは一瞬考え込んだが、すぐに返事を返した。しかしその返事の内容はまるで、なのはに『とらいあんぐるハート』を読んでほしくないといった印象だったが、なのはは素直にリステイの言を聞き入れたのだった。

そうして幾つかの話をしたなのはには1つの懸念事項が存在していた。それを聞こうか聞くまいか悩んでいると――、

「そうだね。この話は両親にもしておこうか」

またしてもリステイはなのはの心を読んだかの如く、話を切り出した。

「なのはのその考えは正しいよ。僕達の事をなのはに明かすよ」

「そうね。なのはちゃんには知っておいてもらった方がいいかもね」

「変異性遺伝子障害って聞いた事はあるかい？」

「はい。ニュースとかで何度か……」

「でも、それがどんな病気かは知らないはずだ」

「はい」

「それだけなら、たいした病気ではないの。でもその中に稀にHGSと呼ばれる高機能性遺伝子障害者というのが生まれるの」

「それが僕達というわけさ」

「!？」

重大発表になのはは驚くが、それがどのような病気なのかはいまいちピンと来ない。

「そうね、所謂超能力が使えるという認識で良いわよ」

「超能力……魔法とは違うんですか？」

「魔法とは違う……けど——」

しかしリステイはその先を語る事は無かった。

「HGSの特徴はこれさ」

リステイがそう言うと、一瞬辺りが眩しくなったがそれはすぐに収まった。そしてなのは目の前には——、

「わー、妖精さんみたい」

リステイとフィリスの背中に笏状の淡く輝く透明な羽が出現した。

「なのはは良い子だな。性根の曲がった奴なら虫みたいだと言いやがるからな」

そう言つてリステイはなのはの頭を撫でる。

「この羽はリアーフィンって言うんだけど……まあ、関係ないわね」

「すごいです！ お空を飛べたり出来るんですか？」

フィリスが説明を続けようとしたが、なのははそれどころでは無く、興奮した面持ちであった。

「ああ、飛べるね。他にもいろんな事が出来るんだ。だから何かあったら遠慮せず僕達を頼ってほしい」

そして2人は羽を消失させた。

そのあと、3人で昼食を取り親睦を深めた。その時、お互いの連絡先も交換しておいた。そして、フィリスは仕事があるからという理由で一同解散となった。

「じゃあ、なのはは僕が家まで送っていくよ」

そしてなのははリスティと2人で家に帰るのだった。家に帰る途中、リスティがなのはに話し掛けて来た。

「両親に話す時は日を改めて僕も一緒に行くよ。1人だと話し辛いだろう？」

「はい。お願いします」

「あー、でもこの話は出来れば両親だけで、兄さんと姉さんには内緒に出来ないかな」

「え？ どうしてですか？」

「2人も当事者になるからね。変な先入観は持たない方がいいしね」

「その方が良いならそうしますが……」

「まあ、その事も踏まえて両親と相談すれば良いよ」

その後も様々な話をしていく。自分の話。仕事の話。家族の話。そして神社の狐の話になるとなのはは異様に食いついた。それに関しては今度恭也と一緒に会いに行つ

てほしいと薦められた。

そうこうしていく内になのはの家の前までやって来た。ここでお別れ、という時にリステイが最後の話を切り出した。

「ああ、そうそう、なのはの兄さんに伝言良いかな？」

「? はい」

「7年前の桜並木での約束を覚えてないか聞いてほしい」

「約束、ですか……」

「ああ、といつても、僕は関係ないよ。僕の知り合いとの約束らしい。まあ、忘れてたら忘れてたで構わないよ」

そうしてなのははリステイと別れた。その日の夕方、なのははリステイに頼まれた伝言を恭也に伝えた。恭也は少しだけ考え込んだが、思い出す事が出来なかったようだ。しかし、何か思う所があったのか、寝るまで1人道場で座禅をして過ごしたのだった。

3話 『夜の一族』

「——そう、それじゃあ、私も一緒に行くわ」

昼休み、月村忍は妹すずかからの電話を切り、斜め前の席に座る青年に想いを馳せるのだった。

青年の名前は高町恭也。クラスメイトではあるが、まだまともに話をした事は無い。しかし、忍は恭也と同じクラスになってからというもの、恭也の事を頻りに観察していた。と言つても、それは別に恋愛感情から来るものではなかったが、忍にとっては重要な事情が存在していた。

忍にとつて恭也は、今は妹の親友の兄というだけの存在であるが、一族の秘密を共有できるかもしれない存在でもある。

忍が恭也の事を知ったのは高校に入学した直後であつた。それは彼女の叔母である綺堂さくらから聞かされたのである。

——『とらいあんぐるハート』

それはただの恋愛小説と見る事が出来るが、忍達の一族にとつてはとても看過出来ない代物であつた。

なぜなら、その小説には一族の秘密が事細かく描かれているからである。それは、

——『夜の一族』

『夜の一族』とは、欧州での怪異、吸血鬼や狼男などの伝承に由来する人外の種族なのである。それらが迫害から逃れて日本に定着したのが、今に残る『夜の一族』の祖である。

人外と言っても、本当に伝承のような化け物というわけではない。身体能力は普通の人より高く、特殊な能力も有しているが、極めて理性的な存在である。種としても人間との交配によって数を増やす事から、生物学的には普通のヒューマンと呼んでも遜色は無い。

しかし、そんな事が分かったからと言って、普通に生活をする事など出来ない。人間とは得てして自分達とは違う存在を恐れる生き物なのである。それがましてや、血を飲んで、獣の耳が生えてたりすると尚更である。

そのため、『夜の一族』は人知れず「闇」に生きる一族へとなったのである。

『夜の一族』は生き残るために自分達の情報を隠蔽しようとした。確かに存在している以上、その存在を無かった事にする事は出来なかったが、情報を湾曲させる事によって、人外の存在と自分達とを結び付け難くする事に成功した。

そんな一族であるからして、近年の情報化社会の波にも上手く溶け込み、かつ利用し

て見せている。

そんな中、ネット上に開設された『原作改変』の存在もすぐに知る所となった。

当然、そんなものは排除してしまおうと働きかけたが、一向に成功する兆しは見られなかったのである。

ハッカーを使ってサイトへの侵入を試みても返り討ちに合い、公的権力を駆使してプロバイダに直接問い合わせても『転生者』の影は一向に掴めなかった。では、プロバイダを管理している会社を丸ごと買収してしまおうと動いたが、その悉くを別の会社に邪魔されて失敗に終わってしまった。その競争相手として上がった名前もまた、彼の物語と馴染み深い人物であったという事は些か皮肉が効いていた。それはまるで、神の見えざる手に踊らされているかのようにであった。

直接的な対処の手段が無くなった『夜の一族』も、ただ指を銜えて見守っているだけでは無かった。

『原作改変』をネット上から排除出来ない事が分かると、別の手段でそれを隠蔽しようとした。試みた。

数々の掲示板で類似する単語をそれとなく書き込み、『原作改変』を発見し辛くさせた。所謂、検索妨害である。

しかしながら、『夜の一族』が対応をし出した時期が遅く、すでに一部のコアなファン

にとつては『原作改変』は有名なブログと成り果てていた。

今でこそ、『厨二病』と言う単語は一般化したしたが、当時にはまだそんな言葉も概念も存在していなかった。そんな中、『転生者』のプロファイルは正に『厨二病』と呼ぶに相応しい代物であった。

若者の潜在化した妄想というのはどんなに聖人君子な人物であつても必ず存在するものであつた。しかしながら、それを表に出す事は社会的背景が許さなかつたのである。

そこに来て、『転生者』は綺羅星の如く現れた若者にとつての救世主であつた。その先進性はそれだけには収まらず、掲載されていた小説にも言えたのであつた。

——“人外、異能力者との恋愛模様”、“戦う魔法少女”、“科学で説明された魔法”、“獣の擬人化”、“次元世界という壮大な世界観”、“明らかな打撃攻撃を魔法と称する根性”、“19歳なのに魔法少女”

これらの先進性はすぐに受け入れられる事は無かつたが、それでも多くの作家志望の人々に感銘を与えたのであつた。

この事態にやはり焦つたのは『夜の一族』であつた。隠蔽作業は続けていたが、焼け石に水状態になりつつあつた。そしてさらに悪い事が重なつた。

『とらいあんぐるハート1』が現実の出来事と似通つているという事が証明されてし

まったのである。

流石にこの事態は『夜の一族』にとって予想外の結果であった。一族の秘密が正確に描かれている事を含め、実在する場所を背景に実在する登場人物ばかりであった事から、『転生者』は『夜の一族』の実情を知る愉快犯であると断定していた。

しかし、小説の出来事が現実が起こってしまったのである。その真実を知る者は未だ少数であるが、それが不特定の人物である事は覆せない事実なのである。証拠を隠滅するにも、その対象は膨大な人数となり、もはや手の付けようが無い。

ここに来て『夜の一族』はその物語の内容に関しても対処せざる得なくなつた。今までだとまだ、フィクションであると断じる事が出来たが、その根底が覆された事によつて窮地に立たされた現状となつてしまったのである。

そうして、困りに困つた『夜の一族』が内容の隠蔽のために目を付けたのは『二次創作』であつた。しかしこの隠蔽工作は諸刃の剣となる可能性も秘めていた。

なぜなら、『二次創作』とは著作権を侵害した行為だからなのであつた。それが普通の相手であれば、一族の権力を利用してのみ消す事も可能であつたが、今回は相手が彼の『転生者』なのである。一族の情報網からその存在を隠し通して見せたその技術力を持つて逆に返り討ちに合う危険性も孕んでいたからであつた。確かに、『二次創作』自体を一族の者が直接行うわけではないが、その行いが『転生者』の逆鱗に触れてしまえば、

トカゲの尻尾切りにどれほどの効果が見込めるか定かではない。

しかしこのままだと、何れ『夜の一族』の存在が公のものとなってしまう。そこで一族は賭けに出たのである。ベツトは一族の運命。しかし見返りは一族の存続である。

そして結果は――、

――成功であった。

『二次創作』を開始した日から、掲示板でもその話題で持ちきりとなった。そんなある日、掲示板に奴が現れたのである。

それは件の『転生者』である。今までも『転生者』を語る人物は度々出現していたが、その悉くが一族の情報網からも個人が特定できた偽物であると判明している。しかし、今回の『転生者』は違った。どんなに情報網を広げようと、正体を掴む事が出来なかったのである。

そしてそのコメント内容は『二次創作』に対して肯定的であった。そしてその初めて目撃された内容というのが、

――『とらハ虹乙。リリなの虹もキボンヌ。』

文章自体は意味不明であったが、その読みやニュアンスから推察するに、『二次創作』を肯定している意見と捉える事が出来る。

そして『転生者』は度々掲示板に現れては、このような難解な文章を用いて『二次創

作』についてのコメントを書き残すのであった。

これが所謂『ネット用語』の始まりとなった。

今まで掲示板を盛り上げていた人物の大半は、『夜の一族』の隠蔽のための一族の息の掛かった人材であった。そのため、極力、誤字脱字誤用を抑えた書き込みとなっていた。必然、『ネット用語』が生まれる余地は無くなっていったのである。

『夜の一族』が盛り上げた『二次創作』に相次いで、『転生者』が生み出した『ネット用語』の存在に当時のネットの住人は沸いたのである。

『転生者』の手によって引き起こされたこの事態に、『夜の一族』は一時警戒をしたが、幸いにも一族が危惧する結果とはならなかった。

こうして、『夜の一族』と『転生者』とのネット上での攻防は一旦の終息が見られた。そして『夜の一族』の『原作改変』に関する対応は現状維持、或いは不干渉と決まったのであった。

しかし『とらいあんぐるハート3』や『魔法少女リリカルなのは』に深く関わりを持つ『月村忍』と『月村すずか』、及びメイドの『ノエル』と『ファリン』は海鳴市でその時を待つ事が、本人の知らぬ所で決定されていたのである。

閑話休題

忍はずかからの電話の内容を改めて吟味する。内容はこうである。親友のアリサ、なのはと共に八束神社の狐に会いに行くと言うのである。しかも同伴者として、なのはの兄恭也も付いて行くと言うのである。

狐に関して、『原作改変』の存在を知った忍には心当たりがあった。しかし、その狐と邂逅するのはもつと先の出来事であるはずと記憶している。ここに来た原作とのずれに不安を感じたが、筋書という意味では些細な違いにも感じる事が出来る。そもそも『すずか』や、なのはの父『土郎』が存在している以上、この世界は『とらいあんぐるハート』ではなく、『魔法少女リリカルなのは』に準拠した世界であると考察できる。

そのため、このような些細な違いさえも歴史の必然であると感じてしまう。

そして今までの調べで、高町恭也はネットとは無縁の人物である事が判明している。その交友関係内においても、ネットに強い人物は報告されていない。

忍も、自身の恋人になるかもしれない恭也に並々ならぬ関心を持っている。そのため、恭也には打算の無い状態で自身と向き合って欲しく、『原作改変』の存在、延いては『夜の一族』の秘密を知らないであろう現状に安堵した。

そして今回のイベントを、恭也と近づくための切っ掛けにしようと参戦したのであった。

そんな彼女は、ある重大な事柄を忘れていた。神社に行くとい

う事は、とある人物にも会う事になるという点である。その人物が『とらいあんぐるハート2』の関係者であったという事を失念していたのである。

その事実に気付いていたならば、このイベントもまた、作画的な出来事であったと気付く事ができただろう。

『とらいあんぐるハート2』は『夜の一族』に唯一関わりの無い物語であったため、忍びととってそれは盲点ともなったのである。

その伏兵の如く登場するその人物と恭也を賭けて争うライバルとなるのは、もう少し先の話である。

4話 『久遠』

なのは達は一度、翠屋で落ち合った。なのは、アリサ、すずかは勿論、恭也と忍もお互いに顔見知りである事実には驚愕する場面があったものの、一同は改めて八束神社へと向かった。

ここ海鳴市はその名から分かる通り、海に面した都市であるが、同時に山に囲まれた珍しい立地をしている。今でこそ、その海と山の幸に恵まれた清涼な土地柄が、近年の発展の一因であるとも言えるだろう。しかしその昔は、海と山の二重の脅威に曝される人の寄り付かない土地であった。

その土地柄から、生活の安全を祈願を目的とした神社が、ここくにかみやま国守山に建てられる事となった。それが八束神社である。

神社の境内へと続く長い階段を上り、一行は神社へと辿り着いた。本殿の壮かな雰囲気は年を感じさせられるが、境内は手入れが行き届いており清々しささえ感じる事が出来る。

「こんにちは。もしかしてなのはちゃんかな?」

奥から一人の女性が声を掛けてきた。巫女服に身を包んだセミロングの茶髪で、おっ

とりとした印象の女性だった。

突然声を掛けてきた人物に警戒をした恭也だったが、その女性の余りにも人畜無害な雰囲気の一瞬で興ざめるのだった。

「あ、はい。私かなのはです」

名前を呼ばれたのは自身が返事を返してみた。

「あ、やつぱり。リステイさんからここに来るかもって伺っていたの」

「でも、大人数で押しかけちゃって迷惑じゃなかったですか？」

「そんな事は心配しなくても大丈夫よ。久遠、あ、狐の名前ね。久遠を呼んで来るわね」
そう言つて、女性は狐を呼びに奥へ向かつて行つた。そうして暫くすると、女性が子狐久遠を抱えて戻つて来た。

「……くうん」

「か、かわいいー」

腕の中の久遠が心細そうに那美に向かって一鳴きした。すると、誰からともなく感嘆の声が漏れ出して行く。

「あの、触つてみても良いですか？ えーと……」

アリサが女性に質問をしたが、ここに来て自己紹介をしていなかった事に一同は気が付いた。

改めて、お互いの自己紹介を開始した。巫女服姿の女性の名前は神咲那美。ここ八束神社でアルバイトをしているらしい。先程名前が登場したりステイとは同じ寮で暮らしている仲との事。

そして、子供達は久遠と戯れ、大人達はそれを見守りつつ話を続ける。

話を聞く中で、那美も恭也達の通う風芽丘学園の生徒で、1学年下の1年生である事が判明した。姉と入れ替わりになる形で、ここ海鳴に実家鹿児島からやって来たらしい。

一方子供達はと言うと、遠巻きに見守るだけで、なかなか仲良くなれないでいた。那美曰く、人見知りしているだけとの事で、何とかお近づきになれるようなのは達は頑張った。

久遠は賢い狐であった。久遠も久遠なりになのは達の人となりを観察していた。

まず、一番気になったのはさすがであった。自分とは違うが、どこか同族の気配を感じたからである。相手も他の2人に合わせているものの、達観した様子が気になった。

次に気になったのはなのはであった。さすがのそれとは違うが、僅かに異能の気配を感じた。そして、これはどこか那美に似た気配であると直感した。

そして最後のアリサは、金色の毛並みは自身とお揃いであると感ずる点以外はさすがやなのはに感じたような気配も無く、一般人であると分かった。しかし、その身に纏う

雰囲気がいいつも自分にちよっかいを掛けてくる雪虎（虎縞の猫）やぎんが（灰色の猫）に似ているという事で、若干警戒心が芽生えた。

結局はこの日、満足に久遠と触れ合えなかったのは達であったが、今日の所は新たな出会いが出来たと満足のいく1日であった。そしていつの日か、きちんと仲良くなるうと決意を新たにしろのだった。

そうして月日は流れ、なのはは2年生に進級した。今年もアリサとすずかの仲良し3人組が同じクラスになった事を喜んだ。と言つても、多額の助成金を寄付しているバニングス家や月村家の令嬢の意に沿わないクラス分けになる可能性は極めて少ないのだが、当の本人達は今はまだ知る由も無かった。

あの日からの久遠との進展はと言つと、なのはは何度か神社へと足を運び、食べ物を与えたり、お話をしたり、食べ物を与えたりで、8割方餌付けによつて仲良くなる事が出来た。今となつてはなのはが神社に会いに行くだけでなく、久遠がなのはの家に遊びに来るような仲となつた。

アリサとすずかも数回程足を運んだが、習い事の多い身であったため、そう何度も訪問できず、結局は久遠がなのはと行動を共にするようになった後に徐々に仲良くなつた。

そして夏に入る直前、久遠に大きな変化が訪れた。なんと、片言ながらも言葉を話せるようになったのである。この変化には那美や恭也が関わっているらしいが、なのははその詳細は告げられなかった。

実際、久遠の正体は300年も生きる狐の大妖怪であり、現在は力を封じられ子狐の姿をしている。その能力は封印された状態でも強力で、那美の稼業である退魔の仕事の際、雷を放つて悪霊を退治する事が出来る程である。そして他にも様々な能力があり、小学生大の人型に変身する事さえ出来る。

そもそも、封印される切っ掛けとなったのは、久遠に祟りが宿り、神社、仏閣をその雷を以て破壊して回ったからである。当時の流行病が流行った時、薬師であり唯一生き残った久遠の最愛の人が生贄として神主によって殺された悲しみと怒りで怨念に憑りつかれてしまったのである。

そして封印にも限界があった。それがこの夏前に起こってしまったのである。

封印から解放された久遠を、恭也、那美、そして那美の姉であり同じく退魔師の神咲薫の手によって対処に当たったのである。

そして艱難辛苦の激闘の末、久遠に憑りついた祟りのみを退治する事ができたのであった。

そんな現在の久遠は、普段は子狐形態であるが、任意で力を開放し大人形態を取る事

が可能となった。大人時のそれは尻尾の数が5本となり、正に大妖怪として貫禄のある姿である。

それでも長い間封印されていた影響か、精神は幼く、なのは達と遊ぶのが楽しいようである。

この成長した久遠と戯れる事が切っ掛けで、なのはは退魔師の存在を知る事となった。

なのはは魔法を使う事を夢見ていた。『魔法少女リリカルなのは』では魔法を使うのに『デバイス』という魔法の杖が必要だが、簡単な魔法なら『デバイス』無しで行使できる事も知っている。

しかし、今のなのはにはその感覚が分からないでいた。そもそも、魔力とはどんなものなのかすら想像できないでいた。

そこで同じ異能使いでもあるリステイに師事してみたが、以前本人も言ったように魔法とは根本が違うようで魔力の感覚を掴むに至らなかった。

そしてここに来て、退魔師という異能力者である。なのはは退魔師に光明を見出した。

退魔師とは現世に彷徨う霊を祓い、悪霊を退治する職業である。

そして退魔師は霊力と呼ばれる力を使って退魔を行うのである。さらに退魔の一族

はその子供もまた霊力を持って生まれる事が多い。

それは正に、魔導師と似ていてはないかとなのは考えた。唯一の懸念事項は霊視であったが、那美曰く、霊力を持った人でも見えない人もいるとの事で、霊視は『魔法少女リリカルなのは』風に言う『レアスキル』の一種だろうと結論付けた。

そして『魔法少女リリカルなのは』では地球には魔法文化は無いとの事だが、この退魔師というのは公式には存在しない集団なのである。考えてみれば当然である。過半数以上の一般大衆には霊が見えず、その見えない霊を退治する集団などと言われても簡単に信じられるものではないだろう。HGSの例もあるが、異能力に関しては今も秘匿されている。それならば、魔法文化が無いと見られても何ら不思議は無い。

そして退魔師は当然『デバイス』なんて物は使わない。己が力のみで、霊力を操っているのである。

そんな存在であればこそ、魔力の扱い方も学べるのではないかとなのは思い至った。仮に霊力と魔力が別物であったとしても問題はないとも考えていた。別種の力でも何かしらの役に立つだろうと。

そしてなのには誰にも話した事の無いが秘密が存在した。それは、霊を見る事が出来るという事である。そのためなのは自身、霊力は高確率で使えるのではないかと確信していた。

なのは那美に靈力の使い方を教えてくれるよう頼んだ。久遠もなのはに協力して一緒に頼んでくれた。

しかし結果は否であった。靈力とは危険な力であると諭されると、反論が出来なかったのである。『原作改変』の存在を明かせば説得できるかもしれないが、リステイを始め、父士郎や母桃子にも口外しないように言い含められたため、一時断念する事となった。

そこでリステイに相談してみると、思いの外簡単に解決する事できた。リステイはあっさり那美に『原作改変』の存在をばらしたのである。リステイ曰く、
「那美が不公平だから」

との事。今までは何だったのかと聞くと、タイミングの問題らしい。

しかし恭也に教える事だけは何があっても駄目と厳命されてしまった。これに関しては今現在も、士郎と桃子が同意している事柄であるため、なのはは不思議に思いつつも黙っている事を誓ったのだった。

那美に『原作改変』の存在を明かした次の日、改めて師事を頼むと夏休み中に教えてもらう事となった。

なのはが那美に『原作改変』の小説について意見を求めると、

「頑張ります」

と真つ赤な顔をして宣言した後、なのはも頑張りますと言うと、いきなり慌て出したのが印象的だった。

さらに月日が流れ、もうすぐなのはも3年生である。いよいよ『魔法少女リリカルなのは』の始まる季節である。そんな感慨に耽りながら、今日もいつもの3人で過ごす。今日は月村家でお茶会に招待されたのである。恭也も一緒に月村家に向かう。

月村家に着くと、メイドが2人を出迎えるが、バニングス家でもそうだが、この如何にもお金持ち然とした雰囲気なのは慣れないでいた。唯一の救いは、ここ月村家のメイドは家族ぐるみで行うイベントにも一緒に参加するため、親しみ易いという点であろう。特にドジっ子メイドにはさすがでさえ苦笑ものである。

そして恭也はなのは達とは別の部屋へと招待されて行った。

「なのはちゃん、いらっしやい」

さすがが声を掛けてくる。なのはは若干この光景に既視感を感じたが、以前のそれと違って今回は完全に勘違いである。『魔法少女リリカルなのは』ではフェレットのユーノと来たが、今は久遠と一緒である。

那美が『原作改変』を知った日以降、それまでよりも久遠と一緒に時間が多くなった

のである。何かあった時の助けにもなると、那美がなのはに久遠を一時、預けたのである。那美の仕事時には久遠もそちらに協力するが、そもそも退魔の依頼はそんなに多くなく、結果なのはと過ごす時間が多くなったのである。

「久遠、こつちにおいでー」

アリサが久遠を呼んだ。なのは直伝久遠仲良し方、餌付けである。お茶菓子に釣られて久遠はアリサの手に捕まる。当然久遠は暴れるが、アリサは逃がさなかった。

「もう、アリサちゃん。そんな事するからくーちゃんに警戒されるんだよ」

「そんな事分かってるけど……久遠を見ると、こうしないといけない気がしてくるのよねえ」

そんないつもの風景になりつつ光景にすずかは苦笑を漏らして見守る。

そしてなのはの分のお茶が用意されたのを見計らってアリサは久遠を開放した。久遠はなのはの元に戻ろうとしたが、なのはの膝には月村家の猫が陣取っていたため、代わりにすずかの膝上へと落ち着いた。

そんな久遠を撫でながらすずかがある話題を提供した。

「それにしても、恭也さんってどつちと付き合う事になるのかな？ 私としてはお姉ちゃんを応援したいけど、那美さんも頑張ってるのが分かってる分複雑……」

そう、現在の恭也は2人の女性から好意を寄せられているのである。1人はすずかの

姉月村忍、もう一人は神咲那美である。

そうなった経緯はともくでなく、そして重大な理由からであった。

すでに恭也に想いを寄せていた那美はある日、恭也に退魔の仕事を付き添ってもらった。その現場というのが木々の生い茂る山の中にあつた。行きは良かったが、帰りで二人して道に迷つてしまった。そして、やつと麓に出る事が出来たと思つたら目の前には大きな屋敷。と、突然この屋敷の警備システムが作動、那美を護るため恭也がそれを撃退。そして屋敷の主人である忍の登場により、そこが月村家である事が判明した。

しかし最後に登場した忍と共にノエルのも現れ、恭也の剣戟から主人を護つて負傷してしまつた。そしてそれと同時に、ノエルが『自動人形』である事が判明してしまつた。

この自動人形は『夜の一族』の秘密一つであり、知られたからには一族の掟に従い、一族の秘密を守ると『誓い』を立ててもらうか、『忘れる』かしてもらわなければならなかつた。

——そして二人は『誓い』を立てた。

その『誓い』とは単なる口約束などではない。『夜の一族』には相手の意思に強制的に干渉する能力がある。その力を以て『誓い』を強制するのである。

その後の展開は早かつた。『夜の一族』の秘密を共有した恭也に対して忍は一気に心を開いた。そしてそれが恋心へと発展するのに、そう時間は掛からなかつた。

閑話休題

「頑張ってるって……傍から見たら、どう見たって負けてるようにはしか見えないのよ
ねえ」

アリサがそう感想を漏らす。

「でも、お兄ちゃんはいつもより笑うようになったよ」

「それって、苦笑の間違いじゃないかしら？」

「それを言うなら家のお姉ちゃんも那美さんと楽しそうにしてるよ」

アリサに鋭くツツコミされたのはにすずかがフォローを入れた。

「そうね、本人達は楽しそうね。でもそうなるが一番の被害者はノエルさんよね」

アリサが指摘をする。

「あはは」

すずかは苦笑しか出てこなかった。実際に心当たりがありすぎたのである。

「お茶のおかわりをお持ちしましたよ、とっと——」

お盆を持ったファリンが何も無い所で躓いてしまったのである。しかし寸での所で
ノエルが支え、事なきを得たのであった。しかし、

「きやああああ」

別の部屋から叫び声と共に盛大な物音が聞こえたのであった。

「……また……ですか」

ノエルがこめかみの辺りを押さえ、普段はしないような溜息を吐き、現場へと駆けて行ったのである。なのは達にはノエルの背中に哀愁が漂って見えた。

「あはは、確かに大変そうなの」

「そりゃあ、今までドジっ子が1人だったのが2人になったら流石のノエルさんでも、ねえ」

「でも、あれで那美さん、ドジが無かったらかなり優秀だよ？ ドジが無かったら」

「そうよ！ そこよ！ そもそも何で那美さん、すずかの家でメイドさんしてるのよ！」
とうとうアリサが核心をツツコンだ。

そう、現在那美は月村家でメイドとして働いているのである。那美が『誓い』を立てた日から、忍が手八丁口八丁により、月村家のメイドに仕立て上げたのである。

そうして、月村家の一室で、客とメイドと主人による奇妙な三角関係が展開される事となったのである。

「あれ？ でもお兄ちゃん。絶対メイド服より巫女服の方が好きだよ」
なのはの眩きを聞くものは誰も居なかった。

5話 『レイジングハート』

闇夜に蠢く異形の物体がそこにはあった。俗世と隔絶されたかのような静寂な空間の中、木々をかき分け異形の物体は少年へと飛び掛かる。少年は手に持った赤い宝石を前に翳し、攻撃の呪文を唱える。

両者の激しい激突の末、双方共にダメージを負ってしまった。そしてそれは少年の方が被害は甚大で、すでに息も絶え絶えである。

しかし、異形の物体はこれ見よがしに攻撃を執行する。再度の突撃を敢行しようと助走を付けたその刹那、目に見えない力によって行く手を阻まれてしまった。

そして異形の物体は突如、後方へと飛び跳ねる。すると突然、衝撃音がしたかと思うと異形の物体が元居た場所には大きな窪みが出来ていた。それは何者かによる攻撃であった。

その後も異形の物体は右へ左へと攻撃を悉く回避する。そして異形の物体は虚空を凝視すると攻撃も止まった。

——グオオオオオオオオオオオオ!!!

それは異形の物体が咆哮するの!とほぼ同時だった。何者かは点による攻撃は無駄だ

と悟ったのか、面による不可避の攻撃へと切り替えたのだ。しかし、異形の物体による咆哮により、攻撃は殆ど相殺されてしまった。その咆哮の余波は凄まじく、異形の物体の周囲の木々は同心円状に薙ぎ倒されていった。

突然の乱入者による戦闘を暫し啞然と眺めていた少年も、身の危険を感じ、咄嗟にシールドを展開するも、程なくしてシールドが破れ、吹き飛ばされてしまった。

そしてあわや地面に激突という時、背中に柔らかな感触を感じ衝撃が和らいだ。虚空に存在するであろう何者かが見えない力によつて助けてくれたのを直感したが、少年が満身創痍なのは変わらない。

現状、見えない何物かが味方であつたとしても、戦況は明らかに不利であつた。それでも少年は異形の物体を何とかしようと必死に頭を働かせる。

異形の物体は現在、その視線に捕えた何物かを標的にしているようだ。今はお互い睨み合っているのか、ただじつと佇むのみである。

異形の物体にとつて少年は取るに足らない存在と見なされたのか、はたまた、虚空の何者かが脅威であると捉えたのか、現在は少年に眼中が無い状態であつた。

少年にとつて現状は正にチャンスであると言えよう。しかし、自身の最大攻撃は先程あつさりと相殺されてしまった。自分でも攻撃の才能は無い事は理解している。今ここで手を出してもあつさり返り討ちに合うのが目に見えているので、当然攻撃という選

択肢は無い。

そうして膠着状態が続く中、少年はふとある疑問を感じた。

——なぜあいつは動き出さない？

そして同時に異形の物体の視線の先にある空間に目を向ける。

それは、木々が邪魔して見えないが、明らかに上空に何者かが存在する事を示唆している。

そして気付いた。

——あいつは動かないんじゃない。動けないんじゃないか？

少年は先程までの攻防について振り返る。

異形の物体は虚空の何者かによる攻撃が明らかに見えていた。その上での確な回避に成功した。そして次の不可避の範囲攻撃も同じく咆哮による範囲攻撃で迎撃したのである。

そしてここである疑問が生じる。

——なぜ先の攻撃も咆哮で迎撃しなかった？

しかしその回答は簡単に見つかった。咆哮による木々へのダメージと、不可視の攻撃による地面への影響を見るに、不可視の攻撃の方が、威力が高いように感じられる。だからこそ、異形の物体は迎撃ではなく、回避を選択したのだろう。

そして、回避を選択するからには、その不可視の攻撃の威力は自身を害するに値すると感じているのであろう。

咆哮による衝撃波が虚空の何者かに届いているのか分からないが、それで牽制を行わないのは、そもそも虚空の何者かに対して効果が無かったのか、不可視の攻撃の方が早く発動するのか、安易に使えるものではないのであろう。

最後に、異形の物体の姿や攻撃手段について考えてみると答えが出てくる。

異形の物体は黒く禍々しい雰囲気を漂わせている。その形状は安定しておらず、常に歪に蠢いている。手足の類は存在せず、顔の辺りには目と口があるが、それは明らかに生物の範疇外であると分かる。行動手段はその体を器用に変形させることによつて飛び跳ねるように動くのである。しかもその動きは極めて俊敏で、普通の生物では物理的に不可能な動きでさえ可能である。

しかし、それらの形状変化は攻撃に直接利用されることはなく、先に少年がやられたような体当たりによる攻撃が基本となっている。そして現在確認されている遠距離攻撃は先の咆哮のみである。

つまり、異形の物体には上空に存在する何者かに対する攻撃手段が無いのであろうと推測できる。

そして、虚空の何者かもその事に気づきつつも、自身にも有効な攻撃手段が無いのか、

怪我をしている自分のためにあえて睨み合いを続けて時間を稼いでくれているのだと少年は気付いた。

少年は今自分に出来る事を考える。自分の攻撃では異形の物体には意味を成さないだろう。しかし虚空の何者かならば話は別である。全ての攻撃を防がれている現状から、少年は自分のすべき最善の手を思いつき、一瞬逡巡する。

虚空の何者かにその意図が伝わるかは分からない。しかし、吹き飛ばされた時に助けてくれた存在ならば、賭けても良いと決断し、実行に移す。

——『バインド』

それは『魔力弾』^{ショット}に続いて最も一般的な魔法である。効果は単純であり敵を拘束する魔法である。

この『バインド』は補助魔法の一種で、あまり目立たない魔法であるが、事戦術においてはかなり重宝されている。『バインド』の実行には絶えず変化する戦闘の最中、強度は勿論、その発生させる位置やタイミングにも気を使わなければならない。そのため、実戦闘での運用が難しい魔法でもあり、高位の魔導師になればなるほど、『バインド』の扱いは巧みになっていく。

少年はお世辞にも高位魔導師とは言えないが、その仕事柄、補助魔法の扱いには自信があった。その中には当然『バインド』もあり、自覚は無いがその運用は高位魔導師に

匹敵するものであった。

少年による『バインド』で異形の物体を拘束した。効果は数秒も持たない僅かなものであったが、それは、現状を打破するには十分な時間であった。

少年の意図が伝わったのか、『バインド』が展開するとすかさず攻撃が再開された。

その攻撃はその攻撃は僅かな時間で異形の物体の体のあちこちに穴を穿つに至った。しかし、その攻撃で確実にダメージを与える事は出来たが、無力化までは出来なかつた。そしてそればかりには留まらず、異形の物体が拘束から逃れるとすぐに体の穴が塞がりだし、元の姿へと戻っていったのだった。しかし、それでもダメージが蓄積されているのか、その動きに若干精彩は無く、続く追撃を避けるも、僅かに体をかするようになった。

異形の物体は現状では少年を脅威と感じたのか、攻撃を避けながらも少年を見据える。

少年も次は確実に自分に向かつてくるだろうと覚悟を決める。

少年は呪文を唱える。今度は攻撃呪文ではない。戦闘の最中作り上げた異形の物体を無力化するための封印術式を展開する。

瞬時に危険を感じ取ったのか、異形の物体は攻撃にさらされるのも厭わず少年に突撃していった。

異形の物体がぶつかる直前、封印術式は発動した。

——ジュエルシード、封印！

少年は自身に残る魔力を使い切る勢いで封印魔法に力を込める。そして——。

なのは目が覚めると辺りを見渡す。それはいつもの自分の部屋であった。いつもなら、眠気眼なまま、もそもそと朝の支度をして目を覚ますのであったが、今日はいつもとは事情が違った。なのはは瞬時に頭を覚醒させ、先程見た夢について思考を巡らせる。

あれはジュエルシードによる思念体と、ユーノであると即時に気付いた。とうとう『魔法少女リリカルなのは』が始まったのである。

リステイは以前からそれが悪戯で済めばいいとなのはに愚痴っていたが、現実は無常であった。なのはもその時は同意をしていたが、心のどこかでは実現してほしいと願っていた。

しかし夢に登場したユーノを見て、その考えは浅はかであったと反省した。現実ユーノは思念体と戦い、大怪我を負ってしまったのである。

なのはにとって『魔法少女リリカルなのは』はまだ、現実味の無い夢物語であると心の隅では思っていた。怪我をし、苦しみ、悲しむのも物語の中での事で、その真の意味

に気付いていなかった。

——現実であると理解しているつもりになっていた。

——現実であると覚悟しているつもりになっていた。

魔法という空想に浮かれていた現実が気が付いた。なのは本当の意味での理解も覚悟も出来ていなかったのだ。

「ユーノ君……」

なのははまだ見ぬ未来の相棒の安否を心配した。今すぐにでもユーノの元へ駆け付けたかったが、如何せんなのは小学生である。これから学校に登校しなければならぬ。

なのはは携帯を握りしめる。こういう時に助けられると約束してくれたリスティの電話に掛ける。

数回のコールの後、電話が繋がる。

『あー、もしもし』

気怠そうな声色のリスティが出た。

「あ、リスティさん！ 夢を見たの！ それでユーノ君が——」

『悪いなのは。こっちから連絡しようと思ってたんだ。ユーノは取り敢えず保護したつて』

「——怪我し、て……………え？」

『あー、怪我に関しては病院で治療してもらったから。因みに動物病院の方だよ。最後に力尽きてフェレットになったからな』

なのははリステイのまさかの返答に困惑した。

「……………」

『なのははこれから学校だろ？ 帰りに動物病院によつてほしい。話がある』

「え？ あ、はい。分かりました」

そうしてリステイは電話を切った。なのははどこか釈然としない気持ちのまま、朝の支度に取り掛かったのだった。

学校の授業中、なのはは自身の失態について考えていた。知っていたはずなのに防げなかった。この事実が今のなのはには重く押し掛かる。なのはは改めて魔法について考え、授業の内容は耳に入らなかつたようだ。

そしてそれは昼食中でも同じであり——、

「——ねえ、なのはちゃんは将来何になりたいの？」

「魔法少女——って違うの！ なのはは、えっと、えっと……………」

呆けていたのが祟り、なのはは失言をしてしまった。必死に取り繕うとするが、時す

でに遅く、にやにやと意地の悪い笑みをしたアリサがなのはを捉えている。

「へー、魔法少女ねえ」

「だから違うの!」

なのはは否定するもアリサには通じなかった。

「良いんじゃないかな? 魔法少女。夢が有って」

「すずかちゃん……」

すずかがなのはを微笑ましそうに見詰める。

「確かに、ぷつ、すずかの言う通りね。夢があるわよ」

「アリサちゃん……」

親友に笑われてなのはは軽く絶望した。

「アリサちゃん、笑うのは可哀相だよ。普通の小学生ならなのはちゃんみたいに夢を見ているものだよ」

すずかがフオローするも、なのはには逆効果だった。

「にやー! だから違うの!!」

誤解を解こうとなのはは叫び出す。

そうすると、周囲の視線がなのはに集中しだした。3人は気まぎれなくなったため、この話題を終了させて、そそくさと昼食を済ませて教室へと戻った。

本当に夢なら良かった。今のなのは心の底からそう思うのだった。

放課後になり、3人は並んで校門へと向かう。

「くうん！」

「あ、くーちゃん、お待たせ」

なのはが3年生になってから、久遠は毎日のように校門でなのはの下校を待つようになったのである。

なのはにとってそれは、既に日常の風景となりつつあったが、久遠と共に居る事は非日常への備えであった事を改めて思い出した。

久遠を眺めながら、なのはは自身の置かれた立ち位置を再認識する。

なのはの代わりになる者が現れるとは限らない。最悪の事態を想定してなのはは常に誰かに護られている。

なのはは皆に期待されているのだ。その期待に応えるべく、なのはは決意を新たにすのだった。

そしてなのはは久遠共に病院へと向かう。既にアリサとすずかとはお別れしていた。病院についたなのは達は、リステイに案内されてユーノの元へと向かった。

そこにはベッドの上で眠っている包帯をしたフェレットが居た。その寝息は規則正

しく、なのはを安心させるには十分であった。

リステイは懐から蒼い宝石を取り出して話し出す。

「これが『ジュエルシード』だ。なのはにはこれを封印してほしい」
「え!？」

なのはは、既にジュエルシードがある事に驚いたが、それよりも、いきなり封印してほしいと言われた事に戸惑った。

そして眠った状態のユーノに顔を向けるがそこには本来あるべき物が無い事に気が付いた。

『レイジングハート』はここにある」

赤い宝石はリステイの手の中にあつたのだ。

「え、でも勝手に貰うのは……」

当然の懸念事項をなのはは口にする。『魔法少女リリカルなのは』では有事の際の緊急措置的に『レイジングハート』が『なのは』の手に渡つたのである。そして現在はその持ち主の意識は無い状態なので、勝手に貰うのは泥棒になってしまう。リステイの職業を思い出すと尚更駄目な事であると思つたが、

「大丈夫だ。許可は彼女に取った」

そう言つてリステイはレイジングハートに目を向ける。

『Nice to meet you』

レイジングハートが点滅をしてなのはに挨拶をした。事態が把握できななのはは混乱してしまった。

「彼女には事情を全部話したのさ」

「……えーと………良いの？」

『No problem』

なのはは逡巡する。これで魔法少女になる条件は整った。一瞬だけ手を伸ばすのを躊躇したが、なのはは決意を新たにレイジングハートをその手に取った。